

論 文

森鷗外の初期批評と漢文学

——「明治二十二年批評家の詩眼」を中心に——

王 憶 氷

広島大学大学院文学研究科博士課程後期

Early criticism of Ogai Mori and Chinese literature

—— Focusing on “The poetry of critics in the 22nd year of the Meiji era” ——

WANG yibing

Abstract: In this paper, we will focus on Chinese literary works that quote the Chinese texts in Mori Ogai's early literary criticism “The Poetry of Critics in 22nd year of the Meiji era”. The purpose is to clarify how Ogai read Chinese literature in the literary criticism of this period. Compared with the Chinese citations of professional literary critics who were active in the Japanese literary world in 1887 and mentioned in Ogai's literary criticism. Analyzing the characteristics of Chinese literary works quoted in “The Poetry of Critics in 22nd year of the Meiji era” and the time when they were imported into Japan. We will also consider Ogai's writings found in the cited Chinese literary works. We will also consider Ogai's notes in the cited Chinese literary works. In the early literary criticism, we will consider the method of quoting Chinese literature from Ogai, and consider the view of Chinese literature in Ogai during this period through the genre of criticism.

Keyword: Mori Ogai, Chinese literary, literary criticism, early Meiji era

はじめに

森鷗外の「明治二十二年批評家の詩眼」¹は明治23年（1890）1月25日の『柵草紙』第4号に発表され、後に大幅の改稿を行われ「今の批評家の詩眼」の題目で単行本『月草』（春陽堂、明治29年（1896）12月18日）に収録されている。

坪内逍遙が『読売新聞』に明治22年（1889）の日本文壇を振り返した一連の文章を発表し²、鷗外はそれに刺激を受けて、「明治二十二年批評家の詩眼」

で明治22年の批評家の文章に対して議論を展開している。この批評文は主に石橋忍月と内田不知庵の批評文を取り上げ、明治22年に活躍した文学批評家の主張を批評し鷗外自身の文学理論を述べている。その背景として、明治20年代にはじめて専門的な文学批評家が現れ、明治20年に石橋忍月、明治21年に内田不知庵をそれぞれ文学批評の活動を始めている。

「明治二十二年批評家の詩眼」では、冒頭に逍遙の一連の文章を高く評価し、明治22年の批評家の活動を批評する意欲を表した後、文学批評の必要性から論を始めている。明治22年の批評家から、石橋忍月と内田不知庵を取り上げ、実際派と理想派を基準に二人の理論を評価し、続いて小説の定義に関する二人の言説を取り上げて批評している。

それまでの批評文で鷗外が一貫して唱えてきた美以外の目的を排斥するという理論がここでも繰り返されており、坪内逍遙や依田学海をあげて勸懲の傾向を批判している。また、批評家たちの言説を引きながら小説の構造や素材などを論じて、最後に、これも鷗外が提唱してきた芸術的空想という詩想について議論を広げている。

さて、「明治二十二年批評家の詩眼」をめぐる先行研究はこの時期における鷗外の文学思想とその変化を分析するものが中心となっている。小堀桂一郎は鷗外が同時代の批評家を考察する時の理論的根拠はゴットシャルの『詩学』にあり、ゴットシャルに学んだ理想、実際の二派の図式的操作が硬化し、後にハルトマンの審美学に触れ、大いに悟ったとして鷗外の考察の方法を分析し、構造や詩材を論じるところは実際的な操作があったために、議論の具体性が感じられると述べている³。また、磯貝英夫は、想実論をめぐる鷗外と逍遙の対立は「明治二十二年批評家の詩眼」に既に現れていると指摘している⁴。そして、小倉斉は「明治二十二年批評家の詩眼」を中心に、その前後の批評文における鷗外、忍月の文学主張を分析し、鷗外の文学思想を考察している⁵。

そのほか、鷗外の批評文に注釈をつける研究もあり、島村輝は「明治二十二年批評家の詩眼」注釈の試み」では各段落の大意をまとめて、文中で言及した作家、作品名、文学的事象に注釈を行っている⁶。

こうした従来の研究は西洋から学ぶ理論的根拠や論争の中に現れる鷗外の文学思想を中心に行われている。また鷗外と漢文学の関連を中心とする先行論は文学批評というジャンルは、考察の範囲に入らないのが殆どである。初

期の批評文に言及された漢文学作品に、有名な作品もあれば広く知られていない作品も頻繁に現れることがその一因と考えられる。そこで本論では、「明治二十二年批評家の詩眼」に原文引用される漢文学の作品の引用方法、作品の性格、鷗外による書き入れを中心に分析し、文学批評文を通して鷗外の漢文学に対する理解と受容を考察していきたい。

1 同時代の文学批評家との対照から見る鷗外の漢文引用

「明治二十二年批評家の詩眼」は27頁にわたる長文であるが、ここでその概要を述べておきたい。

批評文の冒頭では、坪内逍遙が明治22年の文学界を回顧した文章を高く持ち上げ、明治22年に注目した文芸雑誌など明治22年の文壇の状況を概観している。その後、文学を進歩させるには文学批評が必要であり、日本漢学者新井白蛾、明代の詩人李攀龍、宋代の文人陳俊卿の言葉を引用して、文学批評の難しさ、優れた批評家の得難いことを語っている。

人世文学の進化には批評ほど必要なるものあらず、されど又た批評ほど畏れるべきものあらず（略）新井白蛾、嘗て曰く「凡銓評人之賢愚。及文字之工拙者。大抵非其器近彼地位者。則見而不達。言而不当也。」と是言や李于隣が「文大業也。校文大役也」と云ひ陳俊卿が「作詩固難。評詩亦未易。」と云ひしと等しく善評家の得難きと善詩人の得難きに似たるを示すものなり（後略）（『柵草紙』第4号 明治23年1月 p.2）

ここで引用した漢文はいずれも、文学を創作することは難しいが、文学作品を批評するのも簡単ではないことを表したものである。それに続いて、諸批評家の中に特に石橋忍月と内田不知庵をあげ、『国民之友』に載せられた石橋忍月の「詩歌の精神及び餘情」（第69号）、内田不知庵の「詩人の感応」（第55号）、「文学の粉飾」（第66号）を対象に議論をはじめている。両者の批評はともに文学の華やかな表現より内容の充実を提唱し、鷗外は「不知庵に分明に理想派の旗色を表はしたれど忍月居士は理想派とも実際派ともつかず」、「要するに二家は極端実際派、即ち、自然派の詩法を奉ずるものにあらず」として、理想派と実際派を基準に判断している。続いて断片的な言説に関わらず、両者の小説の定義に関連する議論をあげ、その中の不適切と判断する内容を

指摘している。ここでも鷗外は小説に美以外の目的を排斥し、模造を批判して芸術的空想を唱えており、坪内逍遙、依田学海などの批評文をあげて、勸懲の傾向に批評を繰り返している。

忍月が述べた小説の構造について、議論の根拠となる『詩学』の原語を忍月が間違っって使っていることを指摘した後、小説の素材となる「詩材」について芸術的空想を表すには外物を借りて表現することが必要だとしている。そのために衣服容貌などを細かく描くことは既に東西の文学家が認めていることであり、ここで『梁谿漫志』の原文を引用し、「始皇見茅焦。記者書云。王杖劍而坐。口正沫出。覩口正沫出四字。則始皇驚忍虎視之状。赫然可見矣」（始皇が茅焦と会見し、記録する人は以下のように書く。王は剣をとって座り、激しい口調で物をいい（口正沫出）、口正沫出の四文字を見ると、始皇の荒々しく、虎視眈々たる様子のはっきり分かってくる。p.18）として、東西の文学家が衣服容貌などの細かい描写を認めていることを主張している。

その後、鷗外は芸術的な空想としての「詩想」の理論を繰り返して論じて、また訳詩という新たな課題を論じて全篇を終えている。鷗外が漢文を引用した箇所は特定の内容や理論の論証に限って、漢文学を論拠に使っているのではなく、今論じている内容に応じて、今まで蓄積してきた漢文の文章を連想して自身の文章に引用する特徴があると思われる。

さて、鷗外は「明治二十二年批評家の詩眼」の中で、石橋忍月を意識して主な批評対象として取り上げ、その批評文を評価し、不適切と考えるところを指摘している。忍月は明治20年から文学批評を始め、同時代の小説に対する作品批評を展開し、専ら文学理論に集中する鷗外とは異なっているが、レッシングを中心に文学理論の根拠を求め、ドイツ文学から学ぶ点においては鷗外と類似している。同時代の批評文に共通しているように、和漢洋の文学理論と知識を例にあげて説明をしている。ここから鷗外が批評の対象にあげる忍月の文章と照らし合わせ、鷗外の漢文学の扱い方について考察したい。

「明治二十二年批評家の詩眼」では、理想と実際の二項を基準にしつつ、『国民之友』第69号に掲載された石橋忍月の「詩歌の精神及び餘情」の言説をもとに、忍月と不知庵について批評している。

「詩歌の精神及び餘情」において、文学の内部の調和を精神といい、外部の調和を余情という。ここで忍月は外部の「綺語華文」より精神を重んじるべきと論じており、この一文の中で繰り返し江戸時代の儒学者皆川淇園の『淇

園詩話』を援用している。忍月は冒頭で内部の精神と外部の調和の説を主張した後に、『淇園詩話』から精神の重要性を論じる長文を引用し、またゲーテの言葉を借りて「是れ皆な考察と感情が詩歌の精神余情と密着の関係を有することを証言したる者なり前述淇園詩話中の冥想と言えるも、詞は変れど帰する所は同一意なり」⁷として、東西の文学者の発言から文学における内部の精神の重要性を主張している。また、外部の調和に拘り、内部の精神をうまく表していない例として中国詩人の趙嘏をあげ、その反対に李白をあげている段落に括弧をつけて、「此一段淇園詩話に載す」と注を加えている。忍月は、議論の中に今書こうとする内容に相応しい漢文の表現を引用する鷗外の方法と違い、精神と調和の理念を掲げて、その説明に複数の例をあげて、定義の代わりに用例をもって説明する姿勢が見られる。

そのほかに、「詩歌の精神及び餘情」では数多い漢詩人の名が触れられている。文学において華やかな表現より内容の感動を説いて、杜甫の「秋興八首」、崔顥の「黃鶴樓」、陶淵明の「停雲」、「歸去來辭」等を内外の調和を成し遂げる好例としてあげている。また、江戸時代の儒学者室鳩巢の『駿台雑話』から、司馬光が杜甫の詩を評しているところを引用しているが、忍月が言及した漢文学の作者は漢詩人に集中し、しかも殆どが有名な漢詩人の詩を引用して自身の文学理念を補強している。忍月がこの批評文を発表したのは東京大学法律学科に在学中の時、漢文の素養は引用の漢詩人からみれば、入門程度であると想像できる。このことから、忍月は有名な漢詩人、あるいは江戸時代の儒学家を通して知った漢学の知識を文学理論の説明に使っていることが推察される。

忍月と対照的に論じている内田不知庵の批評文⁸にも、同様に有名な漢詩人が触れられる程度である。一方、鷗外は同時代の専門的な批評家に比べれば漢文の素養が高かったため、文学批評文の中に触れる漢文学作品の種類も、引用の仕方も違いがある。それは鷗外が学生時代の漢文学修業を見れば理解できる。

鷗外は幼少時に、津和野藩の藩校で四書五経などの漢学の基礎素養を身につけ、上京して医学生時代の時代にも漢学の典籍を読み続けている。鷗外自身の経験に基づいた小説「キタ・セクスアリス」（明治42年（1909）、『スバル』、第7号）を参照すれば『虞初新誌』、『剪燈余話』、『燕山外史』、『情史』等の漢文小説が言及されている。また、鷗外文庫にも青年期に漢籍の読書記録が

多数残っている⁹。このように漢籍を読んでいる一方、医学生時代には漢文学を嗜む友人がおり、二人で漢文を作って遊んだ経験もある。そのため、鷗外は漢文を使って、自己表現の文体として使うようになり、自身の洋行について記録した『航西日記』が漢文体で書かれていたことはその漢文修業の成果だと言える。

『航西日記』では、港の景色を描いて、船に乗っている子供が水に投げられた銀錢を漏らず拾っている場面から連想して、「嶺南雜記云、蛋戸入水不没、每為客泗取遺物」¹⁰（嶺南雜記に曰く、水上居住者は水に沈没することなく、よく来客のために忘れ物を取りに行く）と引用している。これまで蓄積してきた漢文の知識が文章の場面に応じて適宜に活用できるまで成長してきたと思わせる文章である。そのため、数多い漢籍を渉猟した鷗外が目の前の風景に応じて、漢籍に書かれる類似の場面を連想し、自分の文章に漢文の描写を引用する方法はすでに洋行前に形成されていたといえるのであり、「明治二十二年批評家の詩眼」において漢文の引用も同様なモードで扱っていると考えられる。

このことから、鷗外にとって漢文学は何かという大きな問題に対して、日々の修業によって蓄積してきた「漢語コーパル」があり、鷗外が文章を作る際に、その場面の必要に応じて漢文学作品から相応しい表現を引き出すのは、鷗外の漢文学を扱う一つのモードだと考えられるのである。

2 引用した漢文学作品

第1節では「明治二十二年批評家の詩眼」における鷗外が漢文を引用した時の方法を見てきたが、この節では引用された三つの漢文学作品及びその日本に輸入することの特徴について考察して行きたい。

本文で最初に漢文を引用したのは、忍月や不知庵などに対して具体的な批評をする前に、批評の必要性を説いた部分である。鷗外自身の文学理論を語ろうとする熱意が込められていて、漢文体の原文を繰り返し引用しており、特に、文学批評の必要性和困難さを主張しているところに漢文学の表現を多用している。こうした漢文の引用は、鷗外が漢文学を読んでいるときに、文学批評について論じる文章を目にする機会が多く、それらが印象に残っていたからだと思われる。

鷗外が引用した「文大業也、校文大役也」（文は大業なり、校文も大役な

り)¹¹は李于麟の書簡「答馮通府」の最初の一文である。李于麟は明代の李攀龍（1514～1570）で、字于麟、号滄溟である。王世貞とともに後七子の中心人物で、文は秦漢、詩は盛唐として、擬古を主張している。「答馮通府」は明代の著名な散曲家馮惟敏への書簡で、盛唐の詩、秦漢の文を模範にすべきで、秦漢以降はもう文章はないと復古を主張し、明代に至って王世貞や彼のような復古の文学者が現れ、司馬遷や班固などを超えられるかもしれないという李攀龍の考えを表したものである。

また、李攀龍は荻生徂徠らに多大な影響を与えており、荻生徂徠を通して日本に広く受け入れられている。『詩学事類』、『白雪楼詩集』、『古今詩刪』等の作品があるが、李攀龍の編とされる《唐詩選》は江戸期以後の漢詩に大きく影響している。

「答馮通府」が収録された『滄溟先生集』の出版は隆慶6年（1572）である。日本への輸入が確認できるのは宝暦9年（1759）¹²のため、明の中期に成立した『滄溟先生集』はおおよそ200年後に、日本に輸入されていることになる。そして、寛保3年（1743）に『古今詩刪』は和刻本が出版されており、李攀龍の詩を収録した絶句集が盛んに出版、重刻されている。それに加えて、荻生徂徠による享保17年序（1732）がついている『絶句解』は何度も出版された¹³。そのほかに、荻生徂徠編『絶句解拾遺』、宇佐美恵、福島興正編『絶句解考証』などがあげられる。

ところで、兪樾の編集による光緒9年（1883）に刊行された『東瀛詩選』の序文には「其の始めは猶ほ宋季之派に沿襲し、其の後物徂徠出でて、古学を提唱し、慨然として以て復古の教を為し、遂に家々滄溟の集有り、人々弁洲の書を抱き」¹⁴とあり、日本での李攀龍の作品の浸透の度合いが窺える。

また、興味深い点として、李攀龍の作品から尺牘を取り上げて、尺牘の作品集と尺牘の注釈書が複数出版されていることがあげられる¹⁵。これらからも李攀龍の作品が200年後の日本で広く読まれていることが分かるだろう。尺牘の流行については、「明人は、尺牘に技巧を凝らし、その妙手を競い合い、わずかな表現も古典に材を取った。これは事実上、新たな文体の創始である。この新たな文体にたり組んだ人々の中で、李攀龍は最も優れている」¹⁶としている。

江村北海の『日本詩史』には中国の詩風が日本に伝わることに「気運」があると述べており、「中国の詩風が日本に伝わるのだが、それは毎に約二百年

の年月を要する。(略)明の嘉靖期の復古運動が日本に伝わるのはこれも二百年のちの日本の元禄の頃の筈であり、荻生徂徠はまさにその「気運」の必然に従って古文辞を唱えたのだ」とする¹⁷。『滄溟先生集』が日本に輸入されたのは刊行から200年程後であり、様々な形で作品が出版されるなどして、広く浸透していたといえる。鷗外が李攀竜の文章に注目し、自分の批評文に引用したことの背景には、明治初期の日本漢学界において中国明清の文学が親しまれていたことが背景にあると思われる。

次に「作詩固難、評詩亦未易」（作詩は固より難し、評詩もまた易きことあらず）¹⁸は宋代の黄徹による詩話集『碧溪詩話』の序文からの引用である。全10巻あり、古今の詩に対する批評を行っている。黄徹は字が常明、晩年の号が碧溪居士である。『碧溪詩話』の序、跋の紹介によれば、黄徹は宣和六年（1124）に科挙に合格して官僚になり、十年余地方の官吏として勤め業績を残した後、横暴な地方の権力者との不和によって退官し、その後隠居して古今の詩を読んで、十巻の詩論をなしている。『四庫全書總目』の紹介によって、黄徹は詩を評して「大抵以風教爲本、不尚雕華」¹⁹（大抵風教をもとに、雕華を好まず）としている。『碧溪詩話』は清代の叢書『知不足齋叢書』²⁰に収録され、知不足齋叢書に収録された『碧溪詩話』には黄徹の孫である黄燾の跋があり、時間は嘉泰三年（1203）癸亥正月となっている。そのため、『碧溪詩話』の成立は宋（960年～1279年）の後期と推測できる。

鷗外が引用したのは作者黄徹と同時代の官吏である陳俊卿による序文の冒頭の一文である。陳俊卿は宋高宗、宋孝宗の時代に40年間官吏として務めて、宰相までになったが、朱熹、楊萬里などの文人とも親しく交際している。陳俊卿の序文には彼自身の簡潔な詩論が書かれ、序を作る経緯を述べている。陳俊卿の序文には「乾道四年九月二十七日」とあり、乾道4年は1168年、つまりこの年は陳俊卿が宰相になった年でもある。鷗外は批評の最初で文芸批評の必要性を説いたところに、この序文の最初の一文を引用している。李攀竜や陳俊卿の原文は全て作者自身の文学主張や考えを述べる前に、まず文学を批評することの難しさから議論を展開している。鷗外の批評でも同様のプロセスを辿ることで、漢文の表現とその文章の構成を借用しているといえる。

最後に取り上げる『梁谿漫志』は宋代の費昶による筆記である。費昶は字が補之、科挙合格者の進士で、『梁谿漫志』が完成したのは宋代の紹熙3年（1192）である。全10巻あり、朝廷の官制、歴史の考証、詩文の批評など幅広

い内容で、特に蘇軾に関する内容が多い。筆記というジャンルは宋代に盛んとなり、最初は奇怪なことを記録するという志怪の性格から、社会生活、政治生活、作者個人の見解や感想、遊記などまで筆記の内容が多岐にわたるようになってくる。『梁谿漫志』は特に宋代の典章制度の記録が充実で、正史を補足するのに有用とされる²¹。

『梁谿漫志』は刊行してからあまり注目されていなかった作品で、清代になって注目され、清代の文献に『碧溪詩話』からの引用が多く見られる。例えば、清の学者である錢大昕による歴史の考証、経典の注釈の著作『十駕齋養新録』、清の鄭珍によって親族の名称について考察した『親屬記』、清の袁仁林による文言の虚詞についての専門的な著書『虚字説』などに、『梁溪漫志』の記述を引用して考証を行っている内容がある。

現在、鷗外文庫²²に『知不足齋叢書』の一部があり、乾隆41年刊行の『碧溪詩話』と『梁谿漫志』が収録されている。『知不足齋叢書』は清代の大型の叢書であり、江戸時代に日本に輸入されている。『知不足齋叢書』の持渡記録が確認できるのは宝暦12年（1762）、天明2年（1782）、文化2年（1805）、天保15年（1844）、弘化元年（1844）、弘化2年（1845）、弘化4年（1847）、嘉永2年（1849年）、安政6年（1859）であり²³、『知不足齋叢書』の出版が1776年から1823年であることから、出版して間もなく日本に輸入されただけでなく、この間、定期的に輸入されていたことが分かる。このことから、同書の日本での需要が窺えよう。

また、明治時代になっても中国明清時代の作品に需要があったようで、合山林太郎は以下のように指摘している。

明治初期の文壇には中国明清時代の作品を愛読する風潮がある。近世期からの文化的伝統を受け継ぎ、明治初年期に至るまで、漢詩文は、日本の主要な文学形式の一つであった。この時期、人々は幼少期より漢籍に親しみ、漢詩文によって、自身の考えを表明している。とくに専門の漢詩人たちは、清代の詩文を精読し新しい表現を学ぶなどして、質の高い作品を作っている。²⁴

鷗外の漢文引用の背景として、明治初期の日本漢文学界における明清文学への関心があったといえる。荻生徂徠を通して日本に受け入れられた明代の

詩人や清代の叢書に収録された筆記や詩話がその証だと考えられる。明治初期において影響力のある漢詩人は、例えば、森槐南は清の呉梅村や陳碧城に、国分青崖が明の李夢陽に影響を受けている。また、鷗外の漢文の師である依田学海は明代初期の侯方域の文章に影響を受けた²⁵。

明治初期における明清文学の流行は、鷗外もその影響を受け、明清の時期に流行していた漢籍を愛読し、引用している。また、同時代の専門的な文学批評家石橋忍月や内田不知庵の文章にあげられた漢文学の例をふまえて考えれば、鷗外が読んだ作品は、日本漢学者の著作を通して中国古典文学の知識を獲得する段階を超え、日本漢文学界における明清文学の流行から影響を受けて、漢学者相当の水準で書目を選んでいたと思われる。

3 『梁谿漫志』からみる鷗外の読書方法

「明治二十二年批評家の詩眼」にて、鷗外は『梁谿漫志』巻五の「作史華實相副」から引用し、小説の素材として衣服容貌等の細かい描写が認められていることを説明しているが、鷗外手沢本²⁶の『梁谿漫志』には多数の書き入れがあるため、本節ではその書き入れに基づき、鷗外がどのようにこの作品を読んだかについて考察していく。

『梁谿漫志』は前節でも述べたように、全10巻あり、巻一から巻三の始めは宋代の典章制度に関する細かい紹介で、巻三、巻四は主に蘇軾に関する記録である。巻五から巻九までは詩文の鑑賞や雑記等が記され、巻十は志怪、奇聞となっている。鷗外の書き入れは巻三から巻九に見られ、詩文の鑑賞、文人の雑談に関心が集中している。

ここで明治20年代始めの鷗外の文学批評について確認したい。この時期の鷗外の文学批評では、韻文と散文の文体問題が注目されている。「明治二十二年批評家の詩眼」のほか、明治22年11月に発表し、鷗外の文学論をまとめて表した「現代諸家の小説論を読む」（『柵草紙』第2号）にも韻文と散文について論じられている。鷗外手沢本『梁谿漫志』にも「四六」に関する複数の書き入れがある。「四六」は「四六駢儷文」ともいい、対句を基本とする文体である。対句は基本4文字か6文字となるため、「四六」と呼ばれて、韻文の一つである。巻三「元城翁表章」に韻文の文体を使って華麗な表現を排斥し内容の充実を重視すべきだと論じるところに「四六重儉」を書いている。巻四「東坡文效唐體」、巻六「夏英公四六」にも「四六」と書いて、巻五「四六

談塵差誤」に「四六説」と書いてある。韻文の文体を使っても華やかな表現より内容の充実が重要だという論調は「現代諸家の小説論を読む」における韻文と散文の議論と同調である。

また、「現代諸家の小説論を読む」では鷗外が韻文、散文の文体を論じて、中国と西洋において韻文と散文の盛衰を繰り返した歴史をあげ、「想髓は必ずしも形式のために縛せられざるべし。余は我邦に於いては散文と結語との偏重せられざらんことを望むものなり」²⁷として、両方に優劣をつけるべきではないことを説いている。そのため鷗外は漢籍を涉猟する時に、このような関心のある問題に留意し、批評文を創作するときに援用するに足る論拠を蓄積していったものと思われる。

そして、鷗外の初期の批評文で強調している芸術的空想である「詩想」に関する書き入れがあり、巻四「東坡教人作文寫字」に「詩想」と書いてある。「東坡教人作文寫字」はお金で市の商品が簡単に買えることを比喩に使う、文章を作るには、「文章詞藻事実」を市の商品に、文章の「立意」をお金にたとえ、「若能立意則古今所有翕然並起皆赴吾用」（意を明確できるなら、古今のすべてが自身のために使える）というふうに比喩を使って蘇軾の作文の方法を紹介し、文章において作者独自の思想の重要性について論じている。

これは文学における美の独立性、つまり文学と道徳の分離も鷗外がこの時期に力を入れて議論している内容であり、鷗外手沢本『梁谿漫志』にそれと関連する書き入れも残っている。巻五「通鑑不載離騷」に、『資治通鑑』に屈原の「離騷」を収録していないのは、編集者によって「離騷」が政治に対する忿懣と不満の満ちた作品だと判断したためであるとの記述がある。鷗外がそこに「美ト善」と書いている。巻七「明妃曲」にも同様に「美ト善」の書き入れが残っている。ここでの明妃は昭君ともいい、戦争を避けるための和親政策として匈奴に嫁した人物である。『梁谿漫志』の「通鑑不載離騷」は明妃を詠う詩は基本的に自ら国家のために貢献してつとめることを主題としているが、白楽天の明妃詩には新しい視点があるものの、同じくその趣旨から逃れることはできなかったという内容である。鷗外はこのような文学が道徳の制限から離れないという事象から、文学における美と善の独立を連想しているものと思われる。

さて、『梁谿漫志』には文人の雑談なども書かれ、鷗外がこの類の筆記も面白く読んだ記録が見られる。巻三「司馬温公讀書法」では、晴れた日に本を

干し、机が清潔である状態を確認してから本を読み始め、丁寧に本をめくるという司馬光の本を大切にすることが書かれる。欄外に鷗外が「成銘」と書いて、書庫の銘として中国古代の文人の些細な雑談を読んでメモを残している。昭和18年（1943）3月に作成した鷗外の長男森於菟による「観潮楼始末記」には、毎年鷗外が旧宅観潮楼での暑中休暇の行事として、晴れる日に曝本を行う描写があり、書庫から本を運び出して干す場面が描かれている。後年の鷗外の生活様式には中国古代文人の影響が見て取れるかと思わせる場面である。

そのほか、鷗外が医学生時代の読書から既に関心のあった言葉の表現、医学的知識に関する書き入れも残っている。巻六「温公論碑誌」に「諛墓」、巻七「詩作豪語」に「豪」、巻八「樹稼靈仝誤」に「冰封霜」、巻八「陸宣公哀方書」に「衛生」、巻八「薬方傳人」に「衛生」と「傷虫」、巻九「本草誤」に「蠟」と「河豚」、巻九「張文潜粥記」に「粥」などとあるように、その方面の関心を示している。

このように、四六、詩想、美の独立など明治20年代初期の批評文のキーワードが多数現れているため、これらの書き入れは鷗外が帰国後に施されていると想定できる。洋行前に学生時代において鷗外の読書の書き入れは見られる文章の表現、知らない語彙、医学的用語などへの関心がある。洋行後は洋行前の習慣を保ちつつも、西洋審美学に基づいた鷗外の新しい目線による批判も現れ、西洋文学を基準として中国古典文学を読む姿勢が見られる。

詩想、美の独立など鷗外がゴットシャルに学んで、この時期に議論を重ねていた文学理論に関する鷗外の主張に中国古典文学にも言及があるが、それは比喩を通して説明し、作品を対象に具体的な問題を指摘するような断片的、印象的な批評であり、明確な定義や完成した理論が見られない。そのため、鷗外の批評文では引用した内容を重視するのではなく、表現を借用する傾向がある。その背景には、医学生時代から培ってきた膨大な漢学知識と場面に応じて漢文の表現を活用する習慣の影響があると考えられるのである。

おわりに

本論では「明治二十二年批評家の詩眼」における鷗外の漢文引用をめぐって、同時代の専門的な批評家との比較、鷗外の引用した漢文学作品の性格と日本に輸入された時期、鷗外が作品を読んだ時の書き入れを中心に考察を行

った。「明治二十二年批評家の詩眼」において鷗外が漢文を引用したのは、特定する定義や主題の説明に限らなく、批評文における場面に応じて引用している恣意性がある。学生時代に鷗外が漢文学の作品に関心があり、漢文素養が高くなるにつれて、鷗外自身が漢文を作り始め、その時の漢文には既に場面に応じて漢文学の作品から原文を引用する書き方が見られる。洋行後の批評文における引用の仕方は学生時代に培われてきた方法の延長だといえる。

また、鷗外が引用した中国文学作品に日本漢学界の明清文学流行の影響が見られる。それらの作品を読む時に、学生時代からの習慣を残しつつも、洋行によって獲得した西洋理論の影響も見える。鷗外の文章表現には日々の積み重ねによって成立してきた「漢語コンパル」があり、それが漢文を恣意的に駆使する鷗外の文章を成立させると考えられる。

参考文献

- 苦木虎雄 『鷗外研究年表』 鷗出版 2006年6月
 小堀桂一郎 『若き日の森鷗外』 東京大学出版会 1969年10月
 吉田精一 『近代文芸批評史』 至文堂 1975年2月
 磯貝英夫 『森鷗外—明治二十年代を中心に—』 明治書院 1979年12月
 「自紀材料」『鷗外全集』 第35巻 岩波書店 1975年1月

注

- ¹ 本文引用は『柵草紙』第4号（明治23年1月25日）による。全文では引用する時、旧字体を新字体に変え、漢文を引用する時、適宜に読点をつける。
- ² 「明治廿二年文学上の出来事月表」（明治23年1月13日）、「明治廿二年文学界（重に小説界）の風潮」（明治23年1月14日）、「明治廿二年文学界（重に小説界）の風潮（続）」（明治23年1月15日）、「明治廿二年の著作家」（明治23年1月15日）、「新聞紙の小説」（明治23年1月17日）、「新聞紙の小説（承前）」（明治23年1月18日）。
- ³ 小堀桂一郎『若き日の森鷗外』（東京大学出版会、1969年10月）。
- ⁴ 磯貝英夫『森鷗外—明治二十年代を中心に—』（明治書院、1979年12月）
- ⁵ 小倉齊「明治二十二年批評家の詩眼」における鷗外と忍月『淑徳国文』第26号 1984年12月
- ⁶ 島村輝「明治二十二年 鷗外の詩眼—森鷗外「明治二十二年批評家の詩眼」注釈の試み」『女子美術大学紀要』第22号 1992年3月
- ⁷ 石橋忍月、「詩歌の精神及び餘情」、『国民之友』、第69号 p.13
- ⁸ 内田不知庵「詩人の感応」（『国民之友』、第55号）であり、「明治二十二年批評家の

詩眼」に忍月と不知庵を対照して判断するとき、鷗外がこの文を参照している。

⁹ 例えば、唐代の随筆集『西陽雜俎』には全書にわたって多くの読点や傍線が施され、書き入れに「明治十四年十一月廿二日牽舟居士」とあるため、読書の時期が判明できる。書き入れの内容によって、この時期に読んだと推定できる本は、清代の紀昀による短編小説集『槐西雜誌』、幕末の漢学者である加藤霞石の編集による詩文集『品石風雅』、明治11年（1878）に刊行された漢文雑誌『東京今話』、李笠翁批点のある明代の長編白話小説『金瓶梅』、明代の擬話本小説集『石點頭』等がある。

¹⁰ 『鷗外全集』、第35巻、岩波書店、1975年1月 p.78

¹¹ 李攀竜の原文は「文大業也、校文大役也。秦漢以後無文矣、今日古今文十卷有之乎。明興、一二君子天啓其衷、輒窺此契。然而一經伝誦、動駭耳目、未嘗不以為不近人情者。不知千有余歳、精氣旋復、遂跨遷固、勢必至尔。滔滔者天下皆是也、而誰以易之哉」となる（李攀竜、『滄溟先生集』、第28巻、景福堂、道光27年（1847））。

¹² 大庭脩、『江戸時代における唐船持渡書の研究』、関西大学東西学術研究所、1967年3月

¹³ 延享3年（1746）、宝暦12年（1762）、宝暦13年（1763）、天明3年（1783）、天明8年（1788）、享和2年（1802）。

¹⁴ 訳文は川邊雄大の『『東瀛詩選』編纂に関する一考察—明治漢詩壇と日中関係との関わりを中心に—』（『日本漢文学研究』、第8号、2013年3月 p.54）を引用し、原文は「其始猶沿襲宋季之派、其後物徂徠出、提唱古学、慨然以復古為教、遂使家有滄溟之集、人抱弁洲之書」（曲園居士編、光緒9年序『東瀛詩選』）となる。

¹⁵ 『滄溟尺牘』（宝暦元年（1751））、『李滄溟尺牘便覽』（宝暦2年（1752））、『滄溟尺牘国字解』（明和2年（1765））、『滄明尺牘診解』（明和4年（1767））、『滄溟尺牘児訓』（明和6年（1769））等がある。

¹⁶ 高山大毅、『滄溟先生尺牘』の時代—古文辞派と漢文書簡』、『日本漢文学研究』、第六巻、2011年3月 pp.63-64

¹⁷ 新日本古典文学大系65、『日本詩史五山堂詩話』、岩波書店、1991年8月 p.600

¹⁸ 陳俊卿の原文は「作詩固難、評詩亦未易。酸鹹殊嗜、涇渭異流。浮淺者喜夸毗、豪邁者喜適警、閒静之人尚幽眇。以至嫣然華媚、無復体骨者、時有取焉、而非君子之正論也。夫詩之作、豈徒以青白相媿、駢儷相靡而已哉。要中存風雅、外嚴律度、有補于時、有輔于名教、然後為得。杜子美、詩人冠冕、後世莫及、以其句法森嚴、而流落困躓之中、未嘗一日忘朝廷也。孔子曰、『詩』三百、一言以蔽之、曰思無邪。以聖人之言觀後人之詩。則醇醜不較而明矣」となる。（陳俊卿《碧溪詩話》序、曾棗莊編『宋代序跋全編』、第29巻、齊魯書社、2015年11月 p.780）

¹⁹ 永瑲等編、『四庫全書總目』、中華書局、1965年6月 p.1785

²⁰ 『知不足齋叢書』は30集あり、清朝中期の蔵書家鮑廷博によって27巻まで刊行し、彼の死後は子の鮑士恭によって完成される。刊行期間は41年（1776）から道光3年（1823）までである。

²¹ 吳夙維、傅林輝著、『宋代笔记概论』、百花洲文芸出版社、1999年12月 p33、p36、p47

²² 東京大学総合図書館所蔵。

²³ 大庭脩、『江戸時代における唐船持渡書の研究』、関西大学東西学術研究所、1967年 3 月

²⁴ 合山林太郎、『幕末・明治期における日本漢詩文の研究』、和泉書院、2014年 2 月 p.1

²⁵ 緒方惟精、『日本漢文学史講義』、評論社、1961年10月 pp.200-201

²⁶ 東京大学総合図書館所蔵。

²⁷ 『鷗外全集』、第22巻、岩波書店、1973年 8 月 p.68